

## 教育実習生の現状と課題

——実習指導担当教諭のことばより——

渡 辺 孝 憲

### 1 問 題

教育実習は教職に就くことを志す学生にとって総仕上げとなる体験的学習である。しかもそれは「実習」とはいえ、実際の高校という場で本物の高校生を相手にして行うものであるから、本来、決して誤りの許されない性質のものである。従って私達教職課程に携わる者も、「教育実習ガイダンス」という講義では教育実習の意義や、実習の際の留意点などについて指導を行っている。しかし、社会的にみれば温室のような大学生活を送っている学生達にいくらそれを説いてみてもなかなか実感は湧かず、結果的に安易に実習に入って行ってしまい、取り組む姿勢の甘さを痛感する者も少なくないようである。

今回は、今後、実習生が、より具体的な実習への心構えを身につけ、実習の最初の段階から十分に取り組むことができるような指導を考えるために、一つの価値ある素材として、実習校で実際に実習生の指導にあたって下さった指導担当教諭のことばの中から、具体的に掲げられた問題点を拾い上げて検討することにする。

### 2 手 続 き

#### 2-1 調査の対象

昭和59年度、60年度の実習生、計48名の実習校での指導担当教諭(以下、「指導教諭」とする。)

#### 2-2 検討のデータ

これには以下の2つがある。

##### (1) 「教育実習評価表」

まず、別表の「教育実習評価表(以下、「評価表」とする。)」を御覧いただきたい。これは、実習生を担当して下さった指導教諭に、実習が終わったあとで記入していただき、後日、大学に返送していただくものである。従って実習生の目には触れないものであるから、指導教諭の忌憚のない評価がきけるものである。しかし、それでも遠慮があるのか、かなり甘い評価をしてくる指導教諭もいる。筆者が実習校を訪問し、実際の授業実習を見た時に得た感想や、その時にした評価からは程遠いものの中にはある。が、直接、指導教諭に会って話をきかせていただく時に出てくることよりは厳しいものであるから、これをもとに実習生の問題を考えることは意義のあることだと思われる。

なお、昭和59年度に使用した「評価表」はこの表とは若干異なっているが、考察するには差し支えないと思われるものであるので、特にここに掲載はしなかった。

## (2) 「指導担当教諭より」

これはやはり実習終了後、実習生にむけて自由に指導教諭に書き記していただくものである。内容は大まかにいって、

- ① 実習生個人の問題点、反省すべき点の指摘
- ② その実習生が今後教職をめざしていくにあたってのアドバイス
- ③ 実習生に身につけて欲しい、望ましい教師の姿。あるいは、教育論など

などに分けられるようだ。

今回はこのうち、①について、(1)に用いられている項目に従って分類し、(1)と一緒に検討する。また、(1)と違って(2)はチェックだけでなく、具体的な記述がなされているので、問題点を考える上で参考になるであろう。

## 3 結果と考察

「評価表」及び「指導担当教諭より」に記入されている当該実習生の問題点をピックアップし、「評価表」の分類に従ってその数をまとめてみた。その結果が表1である。

なお、この表に関して注意すべき点がいくつかある。

第一に、一人の実習生について、同じ項目が「評価表」にもチェックされており、しかも「指導担当教諭より」欄にも記入されている場合には、

表1 指導教諭によってチェックされた問題点

評 価 の 着 眼 点	件 数
指 導 性	4
協 調 性	3
創意・工夫・創造性	11
意 欲・積 極 性	5
学 力・理 解 力	6
教職志望への自覚	3
教材の目標の明確化	10
教材の系統上の位置づけ	2
教材の分析・検討・総合	8
展 開 計 画	10
板 書 計 画	9
導入時の動機づけ・集中・方向性	4
教材教具の扱い・提示方法	2
発問指示・質問・着想のとりあげ方	6
生徒の理解程度の確認	8
机間巡視等での生徒個人への配慮・指導	6
生徒との相互のやりとり	3
言 葉 づ か い *	4
説 明 の 仕 方 *	9
声 量 *	3
生徒全員を見渡すこと *	2
ホームルームの指導・助言	2
個々の生徒との接触	2
生徒を理解しようとする姿勢	7
毅然とした態度	5
日誌の点検等による学級の把握	2

ダブらないように、件数1としてある。

第二に、件数が0, 1しかなかった項目は省いてある。

第三に、\*印の付してあるものは、「評価表」の項目どれにも分類されえず、そのままの形で取り上げられたものである。すなわち、「評価表」にはない項目である。

第四に、「創意・工夫・創造性」については、i) 全般的な取り組みの姿勢の面、ii) 教材の分析や検討をする際の面、iii) 実際の授業場面の3領域でのものを合計してある。また、「板書計画」には、板書計画と、実際

の板書の際の問題点が、「導入時の動機づけ・集中・方向性」と「教材・教具の扱い」には、指導計画作成時の準備不足の問題と実際の授業場面での問題点が、それぞれまとめてカウントしてある。

### 3-1 件数の多いものの検討

それでは、それぞれの問題点を、件数の多いものから順にみていこう。

なお、以下に挙げられている（例）は全て、「指導担当教諭より」の欄、あるいは「評価表」の総合所見欄に書いてあるものからの引用である。

また、各項目のあとの（ ）内の数字は件数である。

①創意・工夫・創造性 (11) これは先程も述べたように、以下の3領域にみられるものをひとつにまとめてしまったので、数が増えたと思われる。このため、数だけみると、指導教諭が実習生のどの部分をみてチェックしたのかははっきりしなくなる。

大きく分けて3つの領域とは以下のようなものである。

- i) 取り組みの姿勢全体にみられるとする場合。(例)「生徒をひきつける工夫が足りない」
- ii) 教材を分析・検討する上で、どのような教材を使ったらいいかについての工夫が足りないとする場合。(例)「できる限り身近な事象を取り入れてわかりやすくする工夫をすること」
- iii) 実際に授業をする時に導入・展開をどうすればよいかについての工夫が足りないとする場合。(例)「導入・展開・整理の工夫が足りない」

この項目では、「評価表」へのチェックという形での記入が多く、余り具体的にどこが問題なのかが示されていない。逆にいえば、「創意・工夫」の難しさということを示しているとも考えられる。

② 教材の目標の明確化 (10) これは、その教材で、何を教えるのかを明確にすることである。

(例)「まず(様々な)概念をはっきりさせること」「自分が何を伝えようとしているのかをはっきりさせること。伝える内容が生徒達にとってどのような意味を持つものかを考えること。」

「一時間の授業の目標が不明確であった。」

ただ教科書の中味を漫然と生徒に伝えるのではなく、ポイントをつかんで伝えること、その前提として、基本的な概念をはっきりさせておくことの重要性が指摘されている。

### ③ 展開計画 (10)

(例) 「時間の配分かがまずった」「授業は予定通りで行うよりも、生徒の理解度に合わせて行うこと」「個々の生徒の反応に応じて展開すること」

指導案作成の段階で展開計画を徹底的に練り上げておくことが強調されていると同時に、実際の授業場面では、生徒の反応に注目した柔軟な展開が必要であるとされている。

④ 板書計画 (9) この点に関する指導教諭の記述には、具体的なものは少ない。せいぜい「もっと板書計画を綿密に」とか「順序立てて黒板を使うこと」という程度である。余りに具体的すぎる問題であるために、実際に即しては問題点を指摘できても、このような、まとめとしての評価という形では書きにくいのかもしれない。

⑤ 説明の仕方 (9) これは具体的に問題点が指摘されているものが多い。

(例) 「同じ調子で同じ説明を、同じ例をあげてすると生徒はどう感じるか」「早口」「声の大きさが一様である」「生徒の能力に合った説明をすること」「全体的に説明不足である」「一方的な講義調にならないこと」「生徒の顔を見ずに下を向いてボソボソしゃべらないこと」「理解できない子には、繰り返し丁寧に」「逆に「丁寧すぎる」というものもある。

要は、説明する側が説明される側の立場に立っていないところから生ずることであると思われる。またそれは、教材研究の不足からくる、そこまで考える余裕のなさということになるであろう。

### ⑥ 教材の分析・検討・総合 (8)

(例) 「教材研究にもっと時間をかけること」「実験の準備に時間をかけて」「下調べが不完全なところがあった」「一つの教材を深く色々な面から総合的にとらえ、理解すること」

主に、まずはそれにかかる時間の不足があげられている。そしてそれは授業場面では、余裕のなさ、生徒からの質問に答えられない、わからない生徒に対して別の角度からの説明ができない、などの形で現われてくる。いわばこれは、授業実習の大前提である。

### ⑦ 生徒の理解程度の確認 (8)

到るところで、このことの重要性は指摘されているにもかかわらず、実

際にはなかなか実行できない実習生が多い。また、指導教諭の中にも実習の段階でここまで要求するのは無理かもしれないと考えている人もある。

一方、確認する手段としては、机間巡視、個人発表をさせる、小テスト、ノートの点検などを挙げる教師があった。誰でも考えつく「挙手」や「返答」だけでは不十分のようである。さらに高度なものとして、「生徒の表情」に着目することを挙げる教師もいる。

#### ⑧ 生徒を現解しようとする姿勢（7）

これは⑦のような授業内容に関してでなく、全体的に、実習中に生徒に対してどの位理解しようという態度で接しているかというものである。

（例）「もっと生徒の中に飛び込んで欲しい」「生徒との間に壁が感じられた」「もっと生徒の中に入って生徒になじむこと」

これは、表1中の「個々の生徒との接触」（2）とも関連している。

#### ⑨ 学力・理解力（6）

実習教材に関する理解力の乏しさもさることながら、それ以前の、実習生の持つ学力の弱さも指摘される。

（例）「基礎力が不足している」「教材は完全に理解し、知識を豊富にしておくこと」「化学の予備知識を更に増やすこと」

実習直前になって慌てて知識を身につけようとしても大した効果はあがらない。普段から自分の担当する科目については言うに及ばず、幅広い関心が持てるようになっていくことが要求されている。

#### ⑩ 発問指示・質問・着想のとりあげ方（6）

（例）「生徒の答えを自分の思う方に誘導してしまわないこと」「生徒からの質問をきちんと受けとめること」「発問の工夫などにより、生徒とのやりとりを深めること」

特に、質問に対して誤った答えを出してきた場合、生徒からの質問がその授業内容とは直接関連がないような場合の対応が難しいようだ。実習生の側に、教材の内容ギリギリでなく、それよりかなり幅広い知識が備わっていないと十分な対応はできない。

#### ⑪ 机間巡視等での生徒個人への配慮・指導（6）

実習を見ていると、折角机間巡視を行っても、何のために行っているのかわからないと感じられるものがある。極端に言えば、机間巡視の時にしか指導できないような生徒がいるにもかかわらず、そういう生徒の所は通過してしまう。また、形式的、義務的に机の間を歩いているだけの実習生

もいる。

(例) 「無気力な生徒への注意を怠らないこと」「無反応な生徒に対応する工夫をすること」

#### ⑫ 意欲・積極性(6)

この問題はとくに実習のはじめの頃にみられることが多い。何とかなるだろうという甘い考えで実習に望み、そこで厳しさに直面して遅ればせながら勉強し始めるという実習生が必ずいるものである。

(例) 「初めの頃、熱意が見られず、取り組み姿勢が不足だった」「取り組みの甘さがみられた。たとえ実習でも教壇に立った以上は教師である」

#### ⑬ 毅然とした態度(5)

(例) 「もっと自信のある態度をとらないと生徒にバカにされる」「態度の悪い生徒に対しての姿勢が甘かった」「生徒と仲良くすることは良いことであるが、先生であることを常に頭に入れ、指導にあたること」

これは表面的に毅然とした態度をとればよいというものではない。その裏に教育という人間的営みはどうあるべきかという哲学がなければ生徒には伝わらないことである。つい最近まで教師から毅然とした態度をとられていた身の実習生が今日からは訳のわからぬままに逆の立場に立つことの矛盾は大きい。そのあたりを突っ込んで考えることの足りなさは、日常実習生と接していて強く感じることである。

#### 3-2 その他の特筆されるべき問題点

以上、件数の多いものに関して実例を挙げながら述べてきた。一方、件数は少ないが、実習を考える上で大事な観点を提起してくれたいいくつかの記述がある。それらについて考えてみよう。

##### ① 言葉遣いの問題

(例) 「不明瞭なことばづかいが目立つ」「『この公式を使えばうまく解ける』ということばは不適切である」「『こんなところでどうだろう』などということばは使ってはいけない。研究不足から出ていると思われる」

以上のように、

- i) 実習生がもともと持っている話し方に原因の帰せられるもの
- ii) 「問題を解く」という、いわば受験ということを考えての発言

iii) 研究不足のために、自分でも内容を徹底的に理解していないところから、ごまかしの手段として遣われてしまうものがあるようだ。

## ② 声量の問題

(例) 「声が小さい」「声量に乏しく、クラス全体に説明が行き届かない」「『大きな声で』というところが不十分である」

もともと小さな声の人が急に大きな声を出すということは難しいことであるが、話し方でカバーすることはできる。しかし、そのためには、堂々としゃべる自信が持てるだけの教材研究を十分にするなどの、相当の準備が必要である。

## ③ 誤字の問題

これについて触れている指導教諭はほとんどいない。しかし、授業実習を見た限りではかなりの誤字が目につく。さらに多いのは筆順の誤りである。これは「書ければいい」では済まされない問題である。生徒達は実習生を見ていないようで実際よく見ているのであり、そういう細かなところでのミスで教師を評価しているものである。中には生徒に、誤字を指摘される実習生もいる。これも、付け焼刃的に覚えようとしても効果はあがらないものであるから、普段から点検し、書く練習をしておく以外解決の道はない。そうすれば一時的にせよ、あがってしまっ筆順を忘れてしまったり、字を忘れてしまったりということも少なくなるであろう。

## ④ 実習教科・科目に関する基本的観点を養っておくこと

(例) 「数学教育とは何かという観点を身につけること」「数学の勉強をすること」「生徒になぜ理科を学習させるのかを考えること」「化学を日常生活にどう反映させるか」

これらの指摘は、やはり実習生が工学部の学生であるということに関連しているようである。特に数学などでは、理学部の数学と工学部の数学では大きな違いがあることが指摘されており、「数学」そのものの性質に普段接していないために、実習時にどうしても応用的な考えが中心に出てしまうようだ。自分達が日常学んでいるものと、高校教育の中でのそれらの教科・科目の違いということを、できるだけ早くから学習して補うことが必要である。



#### 4 結 論

以上、チェックされた数の多い項目毎に、あるいは、数は少なくとも重大な項目毎に、例を挙げながら検討してきた。

指導教諭の指摘を読みながらそれらの項目を注意深くみてみると、筆者らが「評価表」を作成して時点で考えていたのとは多少異なった次元の分類の基準がありそうであることに気付く。すなわち、「評価表」では大きく分けると「1. 資質」、「2. 学習指導」として「イ. 教材研究と指導計画」、「ロ. 授業」、「ハ. 授業のまとめ・反省」、「3. 生徒指導・特別教育活動」、「4. 生徒への関わり」、「5. 学級経営、事務処理の能力」、「6. 実習態度」となっているが、実習生の問題点として示されたものを見る限りでは、別の分類の方が適切であるように思える。いま、試みにその分類の仕方を挙げれば次のように考えられる。

- A 実習への取り組みの基本的姿勢
- B 教材への取り組み、学力など
- C 指導の計画
- D 実際の指導方法
- E 生徒に対する態度
- F H. R. その他での姿勢

そして、先に挙げた表1の項目をこれらの分類にあてはめてみると次のようになる。

- A 指導性、協調性、創意・工夫・創造性、意欲・積極性、教職志望への自覚
- B 創意・工夫・創造性、学力・理解力、教材の目標の明確化、教材の系統上の位置づけ、教材の分析・検討・総合
- C 創意・工夫・創造性、展開計画、板書計画、導入時の動機づけ・集中・方向性（の検討や予測）、教材教具の扱い・提示方法（の検討）
- D 板書、（実際の）導入時の動機づけ・集中・方向性、（実際の）教材教具の扱い・提示方法、発問指示・質問・着想のとりあげ方、生徒の理解程度の確認、机間巡視等での生徒個人への配慮・指導、生徒との相互のやりとり、言葉づかい、説明の仕方、声量、生徒全員を見渡すこと

E ホームルームの指導・助言，個々の生徒との接触，生徒を理解しようとする姿勢，毅然とした態度，日誌の点検等による学級の把握  
 なお，これらは，チェック数の多い項目のみについて考えているので，「評価表」の中にある項目でも省かれているものがある。  
 また，A～Fを図示すると次のようになる。

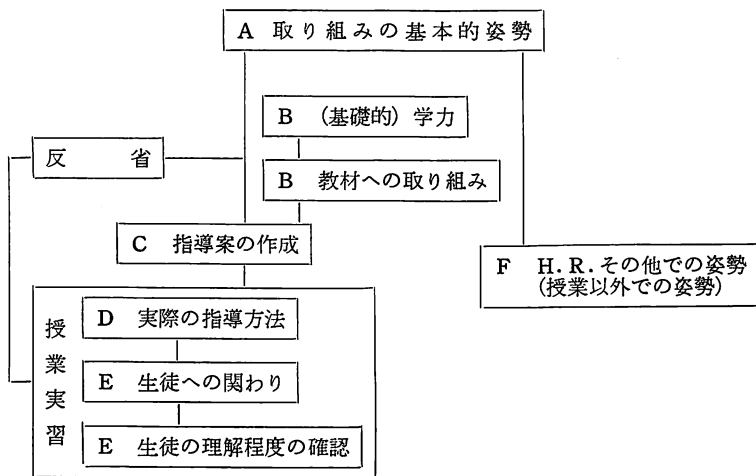


図 指摘された実習生の問題点からみた実習のポイント

次に，表1の結果をA～Fに従ってまとめてみると次のようになる。ここでは，たとえば「創意・工夫・創造性」のように複数領域に考えられているものは，そのまま複数の領域にカウントしてある。( )の中の数字は，全件数に対する百分率である。

- A 27件 (15.4%)
- B 37件 (21.1%)
- C 36件 (20.6%)
- D 56件 (32.0%)
- E 15件 (9.6%)
- F 4件 (2.3%)

計 175件

もともと各領域に含まれる項目数にもばらつきがあり，また分類の基準も曖昧であり，さらに複数の領域にカウントされているものの扱いも必ず

しも適切であるとはいえないので、単純に数的に比較するのは危険かもしれないが、一応大雑把なところはつかめると思われる。圧倒的にDの指導方法のまずさが指摘されている。続いてCの指導計画とBの教材への取り組み、学力など、そしてAの実習への取り組みの基本的姿勢となっている。

これはそのまま、大学での我々の指導のどこが不十分かを反映しているものと考えてよいであろう。具体的には今後の指導の方向として

- (1) たとえば「教授法」のような実践的な科目を設置するなどして、具体的な指導方法に親しませること。
- (2) (1)にも関連するが、指導計画を立てる際の前提として、指導の対象を理解することが必要である。そのために、教育心理学や青年心理学を通して、生徒を理解する方法に精通させること。
- (3) 実習生の専門分野においてはもちろんのこと、それにとらわれないできるだけ広い分野にわたる知識を増やし、教養を高め、それらを自分のものとするよう思考力を養うこと
- (4) 教育原理や教育実習ガイダンスを通して志気を高め、実習への準備態勢を整えさせること

などが考えられる。

## 5 まとめ、今後の課題

(1) 教育実習生の指導にあたった指導担当教諭の記入して下さった「教育実習評価表」及び「指導担当教諭より」欄にみられる実習生の問題点を具体的に検討し、今後、大学で指導上力を入れるべき方向を考えた。

(2) 今回は、問題点を「教育実習評価表」と「指導担当教諭より」欄からのみ抽出してきた。従って、どうしても全体のまとめとしての問題点しか指摘されえなかった観がある。次回は、より具体的に問題点を把握することを目指して、授業実習毎に指導教諭に記入していただく「授業実習の点検」表などを検討していきたい。これにより、実習生の実習期間内の変化のプロセスも見られるかもしれない。

(3) さらに、実習生自身がチェックする「自己評価表」とも絡み合わせて「評価表」の結果を考察することにより、実習生自身の観点と指導教諭の観点の相違も浮き彫りにされ、実習生が客観的に自分の姿を検討できる

ための資料ともなるであろう。

(4) これは、この報告の本筋ではないが、「評価表」を更に改訂して行くことの必要性を痛感した。作成時には十分色々なことに留意していたつもりでも、それが現実在即したものでない点がいくつか見られる。現実を反映できる評価表を作ることが、実習生の姿を正確に把握する大前提であろう。

## あ　と　が　き

最後になってしまったが、毎年、お忙しい中、実習生を気持ち良く受け入れて下さる各高等学校の校長、教頭先生をはじめ、教務担当の先生、そして実際に懇切な指導を引き受けて下さる実習担当の先生方に、この場を借りて御礼を申し上げさせていただきたいと思います。なお、この報告をお読みになったの御意見、御批判などお聞かせいただければ幸せに思います。

別表

## 教育実習評価表

埼玉工業大学 教職課程

昭和 年 月 日

※実習生の自己評価表、「授業実習の点検」などを参考に記入下さい。

※なお、それらの資料と共に大学までご返送下さい。

実習校					学校長					印
指導教諭 (教科)					指導教諭 (学級)					印
教科			実習生 氏 名				授業実習	時		
							特別教育活動	時		
出席すべき 日 数			出席日数			欠席日数			遅 刻	日
									早 退	日
評価項目	評価の着眼点				所見 (気づいた点があれば) (ご記入下さい。)				評価	
1. 資 質	指 導 性									
	協 調 性									
	責 任 感									
	創意・工夫・創造性									
	誠 実 さ									
	明 朗 さ									
	意欲・積極性									
	探究心・研究心									
	学力・理解力									
	教職志望への自覚									

※評価……特にすぐれていたものに○、努力を要するものに△をおつけ下さい。

評価項目	評価の着眼点	所見 (気づいた点があれば) (ご記入下さい。)	評価
2. 学習指導 (イ.教材研究 と指導計画)	教材の目標の明確化		
	教材の系統上の位置づけ		
	教材の分析・検討・総合		
	生徒の実態把握		
	生徒にみあった教材開発の工夫		
	展開計画(留意点や時間配当)		
	板書計画		
2. 学習指導 (ロ.授業)	導入時の動機づけ・集中・方向性		
	教材教具の扱い・提示方法		
	発問指示・質問・着想のとりあげ方		
	生徒の理解程度の確認		
	机間巡視等での 生徒個人への配慮・指導		
	生徒との相互のやりとり		
	言葉づかい		
2. 学習指導 (ハ.授業の まとめ・反省)	授業実習の記録・整理		
	反省点の明確化		
	よりよい授業への努力		
	反省会での批評・助言を生かす		

※評価……特にすぐれていたものに○、努力を要するものに△をおつけ下さい。

別表続き

評価項目	評価の着眼点	所見 (気づいた点があればご記入下さい。)	評価
3. 生徒指導, 特別教育活動	生徒氏名の記憶		
	ホームルームの指導, 助言		
	学校行事, クラブ活動への参加		
	個々の生徒との接触		
4. 生徒への 関わり	生徒を理解しようとする姿勢		
	生徒に愛情をもって接する姿勢		
	毅然とした態度		
5. 学級経営, 事務処理の能力	学級の事務処理		
	教室の環境整備		
	日誌の点検等による学級の把握		
	学級の交友関係, 係などの把握		
6. 実習態度	勤務状況(出欠・早退・遅刻など)		
	実習の全般的態度 (服装, 礼儀など)		
	実習への全般的な 取り組みの姿勢		
総合 所見			

※評価……特にすぐれていたものに○、努力を要するものに△をおつけ下さい。

記録者

㊦